

### 独思録：「ものも言えずに腹ふくる社会」(4/26)

野上八重子がギリシア・ローマ神話集『The Age of Fable』を訳した『傳説の時代』の序を、以下のように夏目漱石は書いています。

「私はあなたが家事の暇を偷（ぬす）んで『傳説の時代』をとうとう仕舞（しまひ）迄（まで）譯し上げた忍耐と努力に少からず感服して居ります。書物になつて出ると餘程（よほど）の頁數になるさうですが嘸（さぞ）骨の折れた事でせう。原書は、私の手元にもあるから承知してゐますが、一寸（ちょっと）見ると四六版の小形の冊子に過ぎませんけれども、活字は細（こま）かし、上下は詰つてゐるし、讀むのにさへ随分（ずいぶん）の時間は懸（かか）ります。況（ま）して一行毎（ごと）に譯して行くとなつたら、それを專業にする男の手でもさう容易（たやす）くは出来ません。」

これは、序のほんのはじめの行ですが、家庭的な婦人が家事の合間に、日本で最初のギリシア・ローマ神話の翻訳を八ヶ月で成就したことに對する、勞（ねぎら）いと感嘆の念が良く顯われています。ここへきて一般企業も公的資金を入れてもらえる法律が成立し、税金による一般企業救済が可能となりました。ITバブルを含む岩戸景氣を凌ぐ長い好景氣に、安穩と經營していた企業、電機業界などから、恥も外聞もなく、我も我もと名乗りが上がりそうです。全く、頑張るといふ氣概や霸氣、それに經營陣に責任感が欠如しています。

しかし、政府においては、國民に對しては、馬鹿にしているのか、國民の多くが効果を疑問視する、定額給付金に続くエコポイントの飴をシャブラセテおけば良いと、如何にも選挙目当ての政策ですと、思いつきよろしく、バラマキ經濟対策を成立させています。これらの經濟対策は、確かに一時的には、國民の懷は僅かですが温まるでしょう。しかし、エコポイント何か無縁な人達ほど、今本当の救済が必要です。

心ある國民にとってはそれがはっきりと見てとれるのでしょう。その証拠に、テレビの街頭インタビューでも、100%賛成ではないようです。また、将来的にその付けが廻ってくることは確実で、今回の經濟対策、本当に良くやったと、勞いの念が湧きません。漱石の序は、更に、「今の人の手にする文學書には耳（みみ）一ナスとかバツカスとかいふ呑氣（のんき）な名前は餘（あま）り出て來ないやうです。希臘（ギリシア）のミソロジーを知らなくても、イブセンを讀むには殆（ほと）んど差支（さしつか）へないでせう。もつと皮肉にいふと、人生に切實な文學には遠い昔しの故事や故典は何（ど）うでも構（かま）はないといふ所に詰（つま）りは落ちて來さうです。あなたもそれは御承知でせう。それでみてこんな夢のやうなものを八ヶ月もかゝつて譯したのは、恐らく餘（あま）りに切實な人生に堪へられないで、古い昔の、有つたやうな又無いやうな物語に、疲れ過ぎた現代的の心を遊ばせる積（つも）りではなかつたでせうか、もし左右（さう）ならば私も全く御同感です。」

と続き、当時の即物的な社会に對する、文豪漱石の社会批判がなされ、よく夢のある文學書に仕上げていると訳者を譽めています。

現在の、当時より更に即物的な社会に対し、漱石はどのような社会批判をするのでしょうか。「国民にとってこんな食えない話はない！」と怒りを発するのではないかと想像します。

それとも、

「弱い神経衰弱症の人間が無暗（むやみ）に他の心を忖度（そんたく）して好い加減（かげん）な事を申して濟みません。もし間違つたら御勘辨を願ひます。」

として逃げてしまうのでしょうか。結局国民は徒然草の「言ひつづくれば、みな源氏物語・枕草子などにこと古りにたれど、同じ事、また、いまさらに言はじともあらず。おぼしき事言はぬは腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつつ、あぢきなきすさびにて、かつ破り捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。」ではありませんが、国民は、それでも、社会の法や常識を逸脱せず、鬱屈をいっぱい飲み込み、腹の中に溜めて我慢しなければならぬのでしょうか。

<野上八重子（1885-1985）>

本名野上ヤエ、旧姓小手川。小説家。大分県臼杵市生まれ。

14歳の時に上京、明治女学校に入学。夏目漱石門下の野上豊一郎と結婚。

『ホトトギス』に『縁』を掲載して作家デビュー。良識ある知識階級の立場からの批判的リアリズムの文学を多く生み出す。



法政大学女子高等学校名誉校長も努め、「女性である前にまず人間であれ」の言を残す。

第二次世界大戦が勃発した時期にヨーロッパに滞在、『欧米の旅』を描き、戦後は宮本百合子の新日本文学会に賛助会員として加わったが、まもなく辞退、戦時下には書けなかった『黒い行列』の続編『迷路』を発表。

その他、小説として『真知子』『若い息子』『哀しき少年』『黒い行列』『秀吉と利休』『森』、翻訳として日本で最初のギリシア・ローマ神話集『傳説の時代』（『The Age of Fable』の翻訳。序文は夏目漱石）『中世騎士物語』（『The Age of Chivalry』の翻訳。日本では最も古い部類に入るアーサー王物語集）など。

<ギリシア・ローマ神話>

紀元前16世紀頃から栄えた古代ギリシアに語り継がれた神話の数々で、紀元前2世紀頃から文明の中心がローマに移ると、ローマ人はギリシア神話に語られた神と人の関係（神の子孫）を、そのままローマ神話として置き換えて語り継ぎました。

一般的にギリシア神話の「オリンポスの十二神」と呼ばれる重要な神々と、それに等しい役割を持つ何人かの神々の名前はラテン名にも置き換えられます。

ギリシア神話において、オリンポス山の山頂に住まうと伝えられる12柱の神々は、主神ゼウスをはじめとする男女6柱ずつの神々で、通常、ゼウス（全能の神：ジュピター）、ゼウスの妻ヘラ（全能の女神：ジュノー）、ゼウスの娘アテネ（知恵と戦いの神：ミネルヴァ）

アポロン（芸術の神：アポロ）、アフロディーテ（恋の女神：ビーナス）、アレス（戦争の神：マーズ）、アルテミス（狩猟の女神：ダイアナ）、デメテル（豊作の女神：シアリーズ）、ヘパイトス（職人の神：バルカン）、ヘルメス（旅行、貿易の神：マーキュリー）、ポセイドン（海の神：ネプチューン）、ヘスティア（火と炉の女神：ヴェスタ）の12神です。

その他の神々では、ハデス（冥界の神：プルートー）、エロス（恋の神：キューピッド）、ディオニュソス（酒の神：バッカス）が有名です。



ヴィーナスの誕生 (0079) プダロー



ヴィーナスの誕生(ボッティチェリ) ワフイツイ美術館

<夏目漱石 (1867-1916) >

小説家、評論家、英文学者。俳人（俳号は愚陀仏）。本名、金之助。江戸の牛込馬場下横町（現在の東京都新宿区喜久井町）生まれ。森鷗外と並ぶ明治・大正時代の文豪。

大学時代に正岡子規と出会い、俳句を学ぶ。帝国大学（後の東京帝国大学）英文科卒業後、松山中学などの教師を務めた後、イギリスへ留学。

帰国後東大講師を勤めながら、『吾輩は猫である』を雑誌「ホトトギス」に発表。これが評判になり『坊つちやん』『倫敦塔』などを書く。その後朝日新聞社に入社し、『虞美人草』『三四郎』などを掲載。当初は余裕派と呼ばれた。

その他『行人』『こゝろ』『硝子戸の中』『明暗』など。



<徒然草>

吉田兼好ことト部兼好（うらべかねよし）、兼好法師（けんこうほうし）が書いた随筆。清少納言の『枕草子』、鴨長明の『方丈記』と合わせて日本三大随筆の一つと評価されている。

鎌倉時代、1330年8月から1331年9月頃にまとめられたとする説が主流であるが、数多くの説があり定説はない。中年期の兼好が著した事になるが、若い時代に書いた文章も含まれているという説もある。和漢混淆文と、仮名文字が中心の和文が混在している。

序段を含めて244段から成る。序段には兼好が「つれづれなるままに」（退屈を凌ぐため

に)書いたとあるが、実際は兼好の思索や雑感、逸話を通じて、いかに生きるかを探求する作品。

内容は兼好が歌人、古典学者、能書家などであったことを反映し、多岐にわたる。隠者の文学と言われている。

吉田兼好が仁和寺のある双が丘(ならびがおか)に居を構えたためか、仁和寺に関する説話が多い。

執筆後 100 年は注目されなかったが、室町中期に僧・正徹が注目。江戸時代には加藤磐斎の『徒然草抄』(1661年、寛文1年)北村季吟の『徒然草文段抄』(1667年、寛文7年)といった注釈書が書かれ、町人などに愛読されて江戸期の文化に多大な影響を及ぼした。それだけに写本は江戸時代のものが多く、室町時代のものは非常に少ない。

室町幕府の九州探題である今川貞世(了俊)は吉田兼好の弟子の命松丸とも親交があり、兼好の没後、編纂に関わっているとされる。



徒然草絵抄の兼好法師



徒然草巻絵本(西川梧陰画明27年6月)



仁和寺

### 春秋：「企業を再生する策」(4/25)

商業においては決して政府の威権を仮(ママ)るべきものにあらず。渋沢栄一は「立会(りっかい)略則」という会社設立の手引書の中でこう書いた。140年近く前のことだ。官尊民卑を破ろうとした渋沢は早くから官を頼らず独り立ちせよと説いた。

その「民の時代」の旗振り役にとって汚点になったのが、三菱との海運戦争だった。三菱と渋沢率いる共同運輸が泥沼の運賃引き下げ競争に陥ると、渋沢は政府に運賃統制を求める建議書を出した。「政府の威を借りるな」はどこへやら。「海運を国営にするのか」と猛反発され、建議書を引っ込めることになる。

日本の資本主義の父といわれ、競争原理を根づかせようとした渋沢も、官頼みの誘惑にかられた時があった。まして世界同時不況下の経営者は、国に助けをもらえる機会がぐんと増えた。今週に入って一般企業も公的資金を入れてもらえる法律が成立し、地方企業に出資や融資をする組織も発足する運びとなった。

運賃が統制されず競争を続けた三菱と共同運輸はその後どうなったか。激しい国際競争のなかでどちらか一方の倒産や共倒れを避けるため、合併に踏み切り、日本郵船となる。これも市場原理が働いた結果である。合併により当時の日本の海運界は、国際競争力を高めた。国頼み以外にも企業を再生する策はある。

< 渋沢栄一 (1840-193) >

雅号は青淵。幕末の幕臣、明治～大正初期の大蔵官僚、実業家。正二位勲一等子爵。武蔵国血洗島村(現埼玉県深谷市)生まれ。

文久元年(1861年)に江戸に出て海保漁村の門下生、また北辰一刀流の千葉栄次郎の道場(お玉が池の千葉道場)に入門、勤皇志士と交友を結ぶ。



その後、一橋家家臣の平岡円四郎の推薦により一橋慶喜に仕え、主君の慶喜が将軍となったのに伴い、幕臣となり、パリ万国博覧会に徳川昭武の随員として訪れ、パリ万博視察のほか、ヨーロッパ各国を訪問。

帰国後、フランスで学んだ株式会社制度を実践するため、慶応4年(1868年)に静岡にて商法会所を設立するが、大隈重信の要請で、大蔵省に入省、度量衡の制定や国立銀行条例制定に携わる。しかし、予算編成を巡って、大久保利通や大隈重信と対立し、明治6年(1873年)に井上馨と共に退官した。

退官後、第一国立銀行や王子製紙・日本郵船・東京証券取引所などといった多種多様の企業の設立・経営に関わり、日本資本主義の父と呼ばれる。

### 天声人語：「漢字は一種の映像」(4/22)

戦前のことだが、「ふりがな廃止論」というのが評判になった。言い出した作家の山本有三は、ふりがなを、「むづかしい漢字をやたら使ったために、そこからわき出たポーフラ」だときき下ろしている（『戦争とふたりの婦人』岩波新書）。

ふりがなをやめれば難しい漢字は使えず、難語はおのずと制限される。そうした一理ある主張ではあった。戦争に負けると漢字はさらに冷遇され、一時は撤廃論やローマ字化論も勢いついた。山本は泉下で、今の漢字ブームに驚いていることだろう。

そのブームの主翼を「漢字検定」は担ってきた。昨年度の挑戦者286万人は大阪市の人口をしのぐ。だが6月に予定されている次の実施が危ぶまれている。日本漢字能力検定協会の「にごり水」が、清まる見通しが立たないからだ。

すでに明るみに出た問題に加え、不可解な高額退職金や、協会名義のカードの私的利用など、色々たわき出している。文科省は検定への後援と大臣賞の交付を取りやめた。

漢字といえば、研究に生涯をささげた白川静さんの面影が浮かぶ。その清廉から、協会の有り様はずいぶん遠い。白川さんは漢字は一種の映像だと言っていた。カタカナでは素っ気ない人の名も、漢字で書けばたちまち姿がよみがえる。サクラより「桜」の方が、さまざまな事を思い出す。

協会の新理事長はきのうの会見で「100日での再生」を強調していた。言葉どおりの立て直しを信じたい。でないと「漢字」とつづる文字に、欲と金のイメージがつきまとうことになりかねない。

#### < 山本有三 (1887-1974) >

劇作家・小説家・政治家。本名山本勇造。現在の栃木市生まれ。東京帝国大学独文学科卒。

在学中から「新思潮」創刊に参加し、卒業後、1920年、戯曲『生命の冠』でデビュー。菊池寛・芥川龍之介らと文芸家協会を結成し、内務省の検閲を批判する一方、著作権の確立に尽力。

1934年に共産党との関係を疑われて一時逮捕されたり、その一方で近衛文麿と親交があり、1941年には帝国学士院会員に選ばれるなどその立場は複雑であった。

戦後は貴族院勅撰議員に任ぜられ、国語国字問題に取り組み、「ふりがな廃止論」を展開、憲法の口語化運動にも熱心に取り組む。

1947年の第1回参議院議員通常選挙では全国区1位で当選。1953年まで6年間、参議院議員をつとめて緑風会の中心的政治家として活躍。1965年、文化勲章受章。

作品に『生きとし生けるもの』『波』『風』『女の一生』『真実一路』『路傍の石』など。



#### < 白川静 (1910-2006) >

漢文学者・漢字学者。学位は文学博士（京都大学）。立命館大学名誉教授、文字文化研究

所所長、理事長。福井県福井市生まれ。漢字研究の第一人者。

甲骨文字や金文といった草創期の漢字の成り立ちに於いて宗教的、呪術的なものが背景にあったと主張し、その後、殷周代社会の呪術的要素の究明は、平勢隆郎ら古代中国史における呪術性を重視する研究者たちに引き継がれた。



万葉集などの日本古代歌謡の呪術的背景に関しても優れた論考を行っている。

ライフワークの成果として漢字学三部作『字統』『字訓』『字通』が上げられる。

その他著作に『詩経 中国の古代歌謡』『漢字 生い立ちとその背景』『金文の世界 殷周社会史』『孔子伝』『甲骨文の世界 古代殷王朝の構造』『甲骨金文学論集』『中国の神話』『漢字百話』『初期万葉論』など。

### 編集手帳：「鬱屈とは何」(4/24)

NHKで「バス通り裏」というテレビドラマを放映した昭和30年代のことという。新潟県の農家から若い嫁が失跡した。ひと月ほどして、うちしおれて戻る。「どこにいたのだ」と聞くと...

「バス通り裏」は善人ばかりで、いつも愉快地暮らし、たいして働きもしない。私は一生を、田んぼの泥んこの中で終える。あの街にあこがれて上京した　そう答えたと民俗学者、宮本常一の「女の民俗誌」にある。

テレビ画面に結ばれた美しい像が現実の手で破られることは、いまもままある。呼び捨てではなく、「クン」を付けずにはいられない清潔感と温かい人柄がにおう人に、深夜の公園での泥酔、全裸は似合わない。

「SMAP」の草彅剛容疑者(34)が公然わいせつ容疑の現行犯で逮捕され、CMやキャンペーンに起用している企業などは対応に追われている。半世紀前の若いお嫁さんと同じように、うちしおれたファンも多かるう。

才能があって、売れて、皆に愛されて、それでも法と常識を超えなくては晴らせなかった鬱屈(うっくつ)とは、何だったのやら。どれも持ち合わせぬ身は、何を脱いだらいいのか分からない。

<宮本常一(1907-1981)>

民俗学者。山口県周防大島生まれ。大阪府立天王寺師範学校(現大阪教育大学)専攻科卒業。

戦前から高度成長期まで日本各地をフィールドワークし続け(1200軒以上の民家に宿泊したと言われる)膨大な記録を残した。

柳田国男とは異なり、漂泊民や被差別民、性などの問題を重視したため、柳田の学閥から無視・冷遇されたが、20世紀末になって再評価されている。

庶民の観点と足で集めたデータと、そのデータに裏づけられた生活者からの観察眼には定評があり、論文「瀬戸内海の研究 島嶼の開発とその社会形成 海人の定住を中心に」の研究と、これまでのフィールドワークの業績により1961年に東洋大学より文学博士号を授与。

著書に『絵巻物に見る日本庶民生活誌』『忘れられた日本人』『家郷の訓』『庶民の発見』『民間暦』『塩の道』など。



### 余禄：「現代の怪談」(4/21)

「東海道の鉄道沿線には狸(たぬき)が能(よ)く汽車の真似(まね)をする。先(ま)ず遠くに赤い燈火(とうか)が見えると思うと次第にガーガーと凄(すさ)まじい音響が加わるので何であろう、貨物列車も通る時間じゃないと思うて間近くなるや.....バツリ跡方もなく消え失(う)せる」。柳田国男が書いている。

明治から大正にかけ「偽汽車」と呼ばれるこの手の怪異譚(たん)は鉄道の延伸と共に全国に広がった。本物の汽車がそれに遭遇し、翌日線路にはタヌキやキツネの死骸(しがい)があったという話が多い。文明開化は各地に新たな怪談ももたらしたのである。

松谷みよ子さんの「現代民話考」によると、偽汽車民話は明治初めの鉄道開通から6～7年後に生まれた。ちょうど運転士が外国人から日本人に代わるころで、松谷さんは日本人による運転が始まると共に狐狸(こり)からも汽車に化け出したという。

それにしても深夜、列車の通らないはずの時間だ。運転席に誰もいないディーゼル車が走っているのを見たら、現代人でも何かの超自然現象かと思ってあわてる人がいよう。津市のJR名松線で8キロにわたり無人列車が走行した一件である。

運転士が席を離れたところ坂を下り始めたという列車は、その間3駅、23踏切を通過しながら衝突や接触はなかった。それこそ狐狸か何かの加護のおかげと感謝すべきかもしれない。それに対しJRの方は3年前にも同じ場所で無人列車を走らせていたというから少し情けない。

鉄道に求められる「安全文化」とは、失敗からきちんと学び、それを繰り返さぬ組織の体質という。狐狸の化けた汽車が消えて久しいが、本当に恐ろしいのは人間のミスが動かす偽列車だと教えてくれる現代の怪談だ。

< 柳田国男 (1875-1962) >

民俗学者。現・兵庫県福崎町生まれ。東京帝国大学法科大学卒業(法学士)。名誉町民第1号。正三位勲一等。

大学では農政学を学び、農商務省のエリート官僚となった後、講演旅行などで地方の実情に触れるうちに次第に民俗的なものへの関心を深めていく。



当時欧米で流行していたスピリチュアリズムの影響を受け、日本でも起っていた「怪談ブーム」のさなかで当時新進作家だった佐々木喜善の招きで、岩手県遠野を訪れ『遠野物語』を執筆。

他に宮崎県椎葉などへの旅の後、郷土会をはじめ、雑誌「郷土研究」を創刊。民俗学の確立した。

その他著書に『蝸牛考』『桃太郎の誕生』『海上の道』『イタカ及びサンカ』など。

<松谷みよ子(1926-)>

本名は美代子。児童文学作家。東京市生まれ。東洋高等女学校卒。日本民話の会会員。

坪田譲治に師事し、『貝になった子供』でデビュー、1951年第1回日本児童文学者協会新人賞を受賞。



1960年の『龍の子太郎』は民話を再創造、幻想的な物語と混交させた世界を作り上げ、地位を確立、1962年、同書で国際アンデルセン賞優良賞を受賞。

1964年『ちいさいモモちゃん』で第2回野間児童文芸賞を受賞。以後、モモちゃんシリーズを続ける。

1970年代半ば以降には、死やあの世に対する関心を深め、1992年第30回野間児童文芸賞受賞した『アカネちゃんとなみだの海』では父の死を描き、また1985年に始められた『現代民話考』シリーズでは、明治以降、昭和の戦争期に民間から発生した民話・怪談を整理収集、その業績も評価されている。

その他『いいおかお』『もうねんね』『のせてのせて』『おふろでちゃぶちゃぶ』『私のアンネ=フランク』など累計100万冊を越える作品を執筆、赤い鳥文学賞、日本児童文学者協会賞などの受賞がある。